

レポート

アクセス・通信環境の良さを 活かしたテレワークの推進

—仕事も余暇も充実の二拠点居住やワーケーション

ライター 秋枝ソーデー由美

竹芝桟橋から高速船で約二時間半、調布飛行場から飛行機で新島空港へ約三五分というアクセスの良さに加え、サーフィンをはじめアクティブに過ごせることができる新島と、海と森と温泉でゆったり過ごせる式根島という、雰囲気の違いなる島を一度に楽しめる新島村は、「週末に気軽に行けるビーチリゾート」として根強いファンを持つ。

じつは、新島・式根島を含む伊豆諸島は、東京都でありながら高速インターネット環境の整備が遅れた地域の一つであった。全国津々浦々で光通信が当たり前になっていた頃、新島村で使えたのは一世代前のADSL回線のみ。週末や観光シーズンになるとネット利用が急増し、通信スピードが一メガbpsにも満たずメールすら送れないという深刻な状況が長らく続いていた。

しかし二〇一八年六月、ようやく光回線が開通。その後、

海底光ケーブルの損傷事故による大規模な通信障害などはあったものの、複数の島から通信経路を確保できるループ回路が二〇二〇年に完成し、現在では高速通信の安定供給が盤石なものとなっている。

高速通信は、住民の生活環境をより快適にするだけでなく、本土側と同様のテレワーク環境が整うということでもある。コロナ禍で観光産業が甚大な打撃を受けるなか、村では首都圏からのテレワークや移住ニーズに応えるべく着々と準備が進んでいる。今回は、仕事（ワーク）と余暇（バケーション）の両方を楽しめるワーケーションの地として変化を続ける、新島村の新たな動きをご紹介しよう。

村営施設をレンタルオフィスに

全国の離島を見渡すと、たくさんの移住者を受け入れて

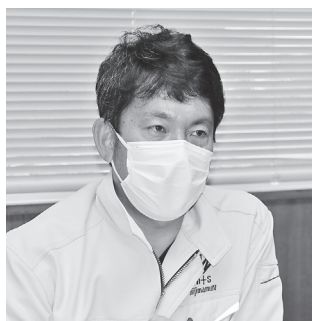


新島村：東京から南へ約160キロメートルの太平洋上に位置、新島と式根島の2つの有人島からなる。新島は、面積22.97km²、周囲41.6km、人口2,095人(令和3年5月1日現在)。式根島は、新島の南3kmにあり、面積3.67km²、周囲12.2km、人口504人(同)。

いる島もあれば、地元住民がほとんどを占める島もある。

新島村は、移住者を受け入れてはいるものの、どちらかといえはまだ少ない地域に入るのではないだろうか。島に移住するためには住居を確保する必要があるが、村には長らく不動産会社がなかった。家を借りたい(買いたい)人は、家主に直接交渉するしかなく、住まいが見つからず島暮らしを断念する人も珍しくなかった。最近、ようやく村内に不動産仲介業者が誕生し、空き家が少しずつ流通するようになってきたが、需要に対する供給はまったく追いついておらず、移住定住の大きなハードルとなっているのが現状だ。

そんななか、新島にある村営施設のひとつである「21クリエートセンター」の利用規定が改正され、令和三年度より事務所として賃貸できるようになり、注目を集めている島の西南部・瀬戸山地区にある同センターは、もともと地域住民の人材育成を目的に「宿泊できる研修施設」として開設されたもの。大人数を収容できるセミナー棟と個室を備えた宿泊棟があり、会議やセミナー、イベントなどに活用されてきた。その後、二〇一〇年の大規模改修を機に、住民の起業促進を目的に宿泊棟の事務所利用も可能となっていたが、さらに今年度から本格的なオフィス棟として仕様変更し、応募要件に合致すれば、一年単位の賃貸契約ができるようになった。二〇二一年春に初めての公募を行なったところ、定員を上回る応募があり、最終的に首都圏から二組の入居が決まった。



新島村役場企画調整室の百成直矢さん。

「21クリエートセンターのオフィス化自体は、島内在住者の起業に結びつけたいという思いから始まりました。今回、公募を行なったのは、島外の方であってもオフィスを持つことで島での起業や移住のきっかけになるのではないかと考えたからです。コロナ禍を契機に、東京などの大都市一極集中型社会に疑問を感じる方が増え、地方への移住や二拠点・多拠点生活へと舵を切る方が増加していると感じています。実際、村には空き家に関する問い合わせがここ一年で急増していて、昨年度は年間六一件もの移住相談が寄せられました」と、同センターの管理や空き家バンクの運営を担当する新島村役場企画調整室の百成直矢さんは話す。

村では、これまで島外の物産展への出展やイベント開催などを通じて、地域のPRを行なってきたが、新型コロナウイルスの流行による自粛などにより、昨年からほぼすべての行事を中止してきた。その代わり、港区や渋谷区との自治体連携を強化し、地域を絞って重点的にPRを行なうことで、より現実的な来島へ結びつくよう働きかけている。この戦略が奏功したのか、今年度に入って空き家や移住に関する問い合わせが増えているという。

テレワークで二拠点生活を満喫

テレワークの普及を機とした、新島への移住者も現れてきている。その一人が21クリエイトセンターのオフィスに入居した高木知明さんだ。ゲーム業界で一五年以上働き、現在も東京のIT・ゲーム関連会社に所属する高木さんは、昨年四月に勤務体制を自宅でのリモートワークに変更。家で快適に仕事ができるよう、オフィス家具を整えるなど工夫してみたものの、都心の狭いマンションでできることに限りがあった。そこでより良いテレワーク環境を求め地方移住を考え、たどり着いたのが新島だったという。

「地方へ移り住むことを考えた時、離島くらいこれまでと環境が違う場所のほうが面白いんじゃないかと思ったのが理由のひとつ。また、もともとバカがつくほど釣りが好きだということも、新島を選んだポイントです。東京にいた



21クリエイトセンターにて。現在は9割以上を島で過ごしている、と話す高木知明さん。

時は毎週末のようにレンタルボートで相模湾へ釣りに出ていましたし、キハダマグロの季節には乗り合い船で伊豆大島近海まで行くこともありました。伊豆諸島の圧倒的な海のかさを知っていたので、

緊急事態宣言が解除された後、七月にまずは大島へ行くこうと思いましたが」

伊豆大島の不動産会社で物件を探したが、希望に合うものほとんどなかった。また、車による移動が必要な大島の生活は、高木さんの求める暮らしの条件とは異なっていたという。そこで「次はさらに先の新島へ行こう」と考え、同月末に初めて新島を訪れた。

「一度目は観光で終えましたが、秋に再び島に来た時には村役場で話をうかがい、『アパートはないが、オフィスが一部屋空いている』と教えてもらいました。オフィスがあれば民宿に泊まりながら仕事ができるし、仕事場までは自転車ですぐ移動可能。島と東京を行き来しながら働いている間に、家が見つければいいと思い、オフィスに応募しました」

海を見渡す小高い丘に立つクリエイトセンターのオフィスは、四九平方メートルの広々とした空間。「ただでさえ一人では持て余すレベルのフロアなのに、全面ガラス張り、テラスもある。開放的でさらに広く感じます」と、オ



一面ガラス張りで開放感溢れる高木さんのオフィス。

フィス環境に満足している。高木さんは、現在もこれまでの会社所に所属し、フルリモートでスマホゲームの開発・運営の仕事を継続している。「(通信環境は)申し分ありません。むしろ通信速度は都心より圧倒的に速い。体感的には五倍くらい速く感じます。ここ二、三年でインターネット環境が大幅に改善されたことがテレワーク時代に追い風になるのでは」と分析する。

「新島に来た当初は、五対五ぐらいの割合で東京と新島を往復する生活をイメージしていましたが、今は九割以上を島で過ごしています。ここで暮らして気づいたのは、リフレッシュ効果が圧倒的だということ。一日仕事をして疲れても、温泉でひと風呂浴びれば回復できます。何か他のことをしてみようという気持ちになれるので、生産時間が自然と増えますね。コロナが収まって東京のオフィスに出勤する機会が増えれば事情は変わってくるのかもしれませんが、今のところ島を離れる理由が見つかりません」

住居も無事にみつかり、本格的な新島暮らしを始めた高木さん。最近では空いた時間を活用して、新島・式根島の観光マップサイトの制作に取り組んでいる。

住民有志によるコワーキングスペース運営

新島で村営のレンタルオフィ스가稼働する一方、新島から連絡船で一五分の距離にある式根島では、民間によるテレワーク環境の整備が進んでいる。二〇二〇年十一月にオ

ープンした「式根島コワーキングスペース(以下、式根島CW)」もそのひとつだ。観光シーズンだけ季節営業している飲食店の閉店期間に、シェアオフィスとして活用するというユニークな二毛作スタイル。式根島CWを運営している一般社団法人式根島エリアマネジメント(以下、式根島AM)の事務担当を務める下井勝博さんに話を聞いた。

「新島は人口が約二〇〇〇人あり、仕事で通ってくる業者も多いのですが、式根島は観光業で成り立っている人口五〇〇人の小さな島です。オンシーズンにはさばききれないほどの人が来るのに、オフシーズンは閑散としていて、一年を通した商売が成り立ちにくいという難点があります。しかも人口の半数が六五歳以上と高齢化が進み、地域を支える若い層が非常に少ない。どうすれば島で活躍してくれる人を呼び込めるのか模索していた時に、観光地に長期滞在しながら仕事をする『ワーケーション』というスタイル

を知り、これから式根島が目指すのはこれじゃないかと考えました」

これまで住民の力でどうかトップシーズンを乗り切っていた島の観光産業も、コロナの影響により来島者が



(一社)式根島エリアマネジメントの下井勝博さん。新島村商工会の経営指導員も務める。

激減、危機的状況に陥った。たとえコロナが終息しても、今まで通りの観光客を受け入れるだけでは、いずれ限界が来る。この機会に新しい流れを作りたいと、島内で商店や宿を営む有志が集まり、二〇二〇年四月に創設されたのが式根島A.M.だ。同組織では、島嶼地区の活性化を目指す東京都の「東京宝島事業」や環境省の「国立・国定公園、温泉地でのワーケーションの推進事業費補助金」などを組み合わせ、式根島C.W.をオープンさせた。

セキュリティを強化した高速通信と、長時間作業しても疲れないオフィス家具を揃えた式根島C.W.の利用は、ウェブサイトで完全予約制。予約が入ると式根島A.M.のメンバーが受付を行なう。常駐スタッフを置かずメンバーが兼業することで、人材不足をカバーする形だ。営業時間は、午前九時から午後四時まで。式根島ならではの美しい夕焼けや温泉めぐり、島の人たちとの語らいを楽しんでもらえるよう、あえて終了時刻を早めに設定した。希望者には島を楽しむための体験プランも検討しているという。



最大13席を備える式根島コワーキングスペース。

「小さな島ですから、一週間も滞在していれば自然と地元の人と話す機会が多くなります。仲良くなれば、一緒にご飯を食べたり、釣りに出かけるなんてこともあるでしょう。そういうことができるのもオフシーズンならではです。新しいことを始めるために専属スタッフを置くのは、式根島では負担が大きい。日常の延長線上で、島の誰かが、できる時にできることをする」というモットーで、式根島C.W.を無理なく維持していきたい」

式根島C.W.は、七月から始まる夏の観光シーズンは休業し、一〇月頃から再開予定。「仕事をしながら島を楽しんでくれる人が来てくれたら」と下井さんは期待を寄せる。

多様な滞在スタイルに対応できる民宿

式根島の宿泊施設にも、新しい動きが起きている。式根島は、自転車で一〜二時間もあれば回れてしまうほどコンパクトなことや、海水浴に最適な美しい入り江がいくつもあることから、昔からファミリー層に人気が高い。しかし近年、女性の一人旅や外国人客が増え、ゲストハウスやグランピング施設といった、従来の民宿とは異なる滞在スタイルの需要が増えつつある。これらのニーズや感染症対策など新しい生活様式に対応する宿として登場したのが「湯ったり宿ひだぶんGH」だ。

ひだぶんGHでは、昭和四十七年創業の民宿「ひだぶん」を改装し、五年前に館内の一部を二段ベッドのドミトリー



式根島の名物女将、「ひだぶんGH」の肥田光代さん。

に変更。さらにコロナ禍での営業自粛期間を利用して、和室の一部をツインタイプの洋室に変更し、車いすでも移動しやすいバリアフリー化を進めたほか、島にはほとんどなかったバス・トイレ付きの個室を整備するなど、館内的大幅改装に踏み切った。高速通信環境も強化し、館内で仕事が可能なのワーキングスペースも新設。民宿らしい畳敷きの和室から、高齢者やカップルがゆったり過ごせるベッドの個室、バックパッカーやテレワークをしたい人が気軽に使えるドミトリまで、利用者が目的に合わせて滞在スタイルを選択できるようになった。

「昔とはずいぶん雰囲気が変わってしまったので、寂しいと話す常連さんもいます。でも、うちはずいぶん地元の人が当たり前のように出入りする宿で、なかには私より常連客と仲良くなる人もいるくらい。時にはお客さんと一緒にごはんを作って食べたり、夜に温泉に行ったりすることもあり、そういうゆったりしたところが島のよさじゃないでしょうか」と、語るのは式根島の名物女将として知られる、ひだぶんの肥田光代さんだ。ひだぶんでは三日以上の滞在に割引料金を適用するほか、テレワークや

釣り、温泉湯治などでの長期利用を見越して一カ月の定額プランも用意しているという。

新島村では、ウィズコロナ時代を見据え、感染防止やビジネスユースに対応するため、客室を個室に改装する民宿が増えていると聞く。また、前述の高木さんのように、テレワークを機に島へ移住する人も増加しており、こうした新しい流れは、今後もしばらく続きそうな雰囲気だ。

村役場の百成さんは、「新島や式根島は空き家も空きオフィスも足りていない現状ですが、コワーキングスペースが登場し、宿の長期宿泊プランも少しずつ増えています。こうしたものをうまく利用すれば、一週間単位のワーケーションの受け入れが可能になります。島で仕事ができれば、島と都市を行き来しながら働く人が現れます。その方々と地元住民との間に関係性が構築されれば、いずれ島に移住する人も出てくるのではないのでしょうか。まずは、宿とオフィスを連携させて、二

拠点居住ができる人を島に呼び込めるよう取り組んでいきたい」と話す。

新島村がテレワーク、ワーケーションの誘致を通じてどのように変貌を遂げるのか、今後に注目したい。

秋枝ソーデー由美

(あきえだそーでーゆみ)

1967年、山口県生まれ、新島在住。東京の出版社で雑誌編集者として勤務後、フリーランスの編集ライターとして多くの雑誌・書籍・広告・ウェブなどの制作を手がける。2015年、新島へ移住。新島カルチャーマガジン『にいじまぐ』編集長、一般社団法人新島OIGIE(オイギーン)理事を務めるかたわら、テレワークで本土からの制作依頼も受ける。「ソーデー」は島の屋号。